巻頭言

日本女子大学教育学科の会
会 長　今 井 康 雄

私は教育哲学・教育思想史を専門としていますが、この教育哲学・教育思想史の領域で、近年、本誌『人間研究』のタイトルを目にすることが増えました。学会大会での発表原稿や、学会誌に掲載される投稿論文の参考文献表に、『人間研究』の名前がしきりに登場するのです。教育哲学・教育思想史の領域での我が『人間研究』の地位（ステイタス）や声価（レピュテーション）は確実に高まっていると言えるでしょう。

『人間研究』への言及が増えた、その原因はかなりはっきりしています。本誌第51号（2015年）に掲載された森田伸子先生の論文「木村素衛における政治と教育――京都学派の身体論を問い直す」が頻繁に参照され引用されているのです。木村素衛（1895-1946）は、西田幾多郎の直弟子であり、西田や田邊元を中心とする「京都学派」の哲学を教育学の領域へと展開した人物として近年特に注目を集めています。優秀な若手の研究者が続々と木村素衛研究に参入しており、彼・彼女らは精力的に学会発表を行いますし、その論文が学会誌に掲載されることも多くなる。そしてその多くが、典拠として森田論文を挙げ、したがって『人間研究』の名前も登場する、というわけです。

森田論文は、総力戦体制に迎合したとして批判されることの多かった木村の戦時中の国民教育論・国民文化論を、身体論の観点から読み直し再評価した力作です。既成の解釈枠組みを組み替えるような独創的な洞察に満ちており、優秀な若手（には限りませんが）研究者が頼りにするのも当然と言えます。漏れ聞くところでは、書き進めるうちに字数が優に3万字を超えてしまい、そんな大部のものはどんな学会誌も受け付けてくれないため（学会誌の投稿論文の字数上限はだいたいどこでも2万字です）、それで『人間研究』に投稿されたとのこと。これは本誌にとって実に幸運でした。

このエピソードで何が言いたかったかというと、雑誌の地位や声価を決めるのは学会誌であるかどうか、とか、査読があるかどうか、とかといった制度的な前提では実はなく、最終的にはそこに掲載される文章のクオリティだ、ということです。最近では、片桐芳雄先生の大著『評伝 成瀬仁蔵――女子高等教育から「社会改良」へ』（風間書房, 2021年）が、本誌『人間研究』に発表された諸論文を中心にして編まれたものであったことが想起されます。

『人間研究』も曲がり角に来ており、今後その編集方針や制度的枠組みについても議論が進められることになるでしょう。しかし、雑誌の性格がどう変わろうとも、＜雑誌の価値を決めるのはそこに掲載される文章のクオリティだ＞ということ、これは変わりません。このことは忘れないようにしたいと思います。